

C-15 道德判断の発達段階に関する研究 VI

日本女大児童研究所 立正大保育専門学校

宇川和子

○望月登志子

石井富美子

目的 成人における道德判断の発達過程を3回にわたる追跡調査で明らかにするとともに認知構造に変化を促した要因を事例に即して検討する。

方法 同一の対象に大学2年次と4年次の時(36名)及び卒業後2乃至3年後(16名)に個別面接を行い、Kohlbergの3例話に対する道德判断とその根拠を求めた。また、思考様式の変化の過程を回顧し、それに関する経験を報告してもらった。

結果 (1)道德判断の平均得点は下表の通り年令と共に上昇し、才3段階の前半から後半へ更に才4段階へと順次推移している。各時期の上昇量71.2, 47.6はいずれも有意な差($P<.005$)

年令	得点	平均得点	上昇量	SD
2年次(20才)		314.4	71.2	39.7
4年次(22才)		385.6		53.6
卒業後2.3年(24.3才)		433.2	47.6	32.4

を示している。(2)各時期の得点は2年次と4年次の間で、 $r=.59$ 、4年次と卒業後の間では $r=.65$ の相関を示している。しかし、2年次～4年次の上昇量と卒業後の上昇量の相関は $r=-.53$ であり、変化の多い時期が必ずしも一様ではない

ことが窺える。(3)道德判断の発達過程を個別に吟味すると、上昇量に個人差があるばかりでなく、変化に三つの型(a: 2年次～4年次に急速に上昇し卒業後は上昇のペースが低下する。b: 前半の上昇量は僅かで卒業後急上昇する。c: 上昇量が一貫して少ない)が認められる。(4)急激な変化を示したa, b型の者は、思考様式の変化を自覚している。(5)変化を促した要因として、友人、職場、授業、家族、書物・マスコミを挙げている。それらの場で異質の視点をもつ人と交流し、その視点に価値を見出した場合、又自己の考え方を変革したいという動機があり、納得のいく忠告や批判が与えられた場合に大きな変化を経験している。